

☆特集 地方議員研修会報告

☆全国で産別大会

☆IUSY 太平洋委員会へ参加 民社  
ゆーす

第34号 1997年10月1日

(平成7年3月17日第三種郵便物認可)

月刊

# 民社

発行 民社協会

編集発行人 梅澤 昇平

〒105 東京都港区西新橋1丁目20番9号

和田ビル4階

TEL (03) 3501-5111 毎月1回1日発行

購読料 年間 2,000円

(会員の購読料は会費の中に含む)

## 二大政党制は幻想だったのか？

産経新聞編集局次長  
熊坂 隆光



### ■政局が分散化している

いま政治の動きが非常に分かりづらい。この原因の一つに“キーマン”の不在が挙げられる。われわれ新聞記者が取材をするとき、以前は自民党の派閥の親分や野党の幹部を一人か二人きちんと抑えれば政治の動きは把握できた。ところが派閥の力の低下で、これまでキーマンではなかったような建設大臣や、ときには一年生、二年生議員の動きが政局を動かす場合も出てきた。政局が分散化してしまっているのである。

この現象が顕著なのは、4年前の政治改革騒ぎ以降だ。このときテレビはワイドショー的に政治の動きを扱った。しかし“移り気で新し物好き”のマスコミは、住専問題や沖縄問題でも明らかなように、今にも日本中が大変なことになるかのように報道しながら、事が終わると一切無関心になる。また今の政治離れ、無党派無関心層が増えている原因も、マスコミが政治を悪し様に言ったり政治離れを煽ったりしている部分が多い。メディアが負うべき責任はかなり大きいのではないだろうか。

### ■「保保」「自社さ」論議で橋本政権安泰

橋本政権のこの半年の経緯を振り返ると、“三月危機”“五月危機”“六月危機”などと騒かれながら、結局何事もなかった。国会もかつての55年体制当時よりすんなり終わり、論戦も低調であった。原因の一つはやはり野党の無力だ。党首が「保保連合」を主張しては対決姿勢など出せるはずもない。

橋本総裁再選が早々に決まったが、総裁選は本来、政界全体を巻き込む路線論争であるべきはずだが、「保保」と「自社さ」のポスト争いに話が矮小化されてしまっている。自社さ派の加藤幹事長の立場は、シーソーのように浮き沈みした。沖縄問題で小沢-橋本が握手して特措法改正が成立した時点では保保派が優勢だったが、国会が無事終了し都議選に勝利すると加藤氏の株が持ち上がった。加藤氏が今度幹事長留任になるとポスト橋本の最有力候補になるため、保保派は何としてもこれを阻止したい……総裁選を中心に両者の思惑が交錯した。

大まかに「保保路線は小沢氏と意見が近く、自社さ路線が比較的リベラル派的」と分けられるが、これを単なる路線論争と見るべきではない。いまの自民党は様々な対立の要素が絡み合っており、「世代戦争」「小沢氏を認めるか否か」「創価学会を容認するかどうか」「経世会復活を認めるか警戒をするか」という、それぞれ人たちの集まりでもある。これら自民党のなかの勢力に均等に橋を架けて成立してい

るのが橋本政権だ。したがって「保保」「自社さ」の論議があるうちは、橋本政権は安泰であると言える。

「保保」のもう一方の「保」である新進党はどうか。マスコミも含め誤解している点は、「保保が実現すると小沢が復権し、新進党の求心力が増す」という見方だ。これは全く逆だ。小沢氏は4年前「反自民の結集」を旗印に自民党を飛び出し細川政権をつくった。その小沢氏が「保保」を主張すること自体、それまでの自分の全否定なのである。当時“守旧派”と非難を浴びせた梶山氏や中曽根氏らと手を結ぼうとしているのである。最近自民党内で“小沢副総裁説”という週刊誌レベルの話まで出ている。このような状況では本当に政治を動かす力にはなりえない。保保の一方の“保”は紛れもなく自民党であるから、「保保」とは決して反自民でもなければ、自民党に代わる政権をめざす力になるはずのものでもない。

### ■「政治改革論議」とは逆方向に

「改革会議」の動きについては未だ不透明である。「保保」が大きな流れとなっていけば、その対照的な求心力として具体的になることはありうる。しかし残念ながら、その中心となる民主党一つとっても、旧社会党の勢力は強すぎるし、また鳩山氏と菅氏の考え方の違いなど問題が多い。今の状況で改革会議が大きくなるということは考えられない。

政局はかつての自民党の「三角大福中」などといった権力闘争の次元にまで落ちている。われわれは一時期「自民・非自民の二大政党制ができるのではないか」という幻想を抱いたが、残念ながら現実の政治は政治改革論議が高まったときと逆の方向に向かっている。

ではこのまま自民党中心の政治が続くのか。決してそんなことはないと思う。国民の意識が多様化するなか、巨大な大政翼賛会的組織ができることはありえない。ある程度肥大化すれば分裂や対立が必ず起きる。いずれ次の選挙の前までは政界再編の揺れが今一度来ると思う。そのときに、これまでのように選挙に勝つための新党づくりだとか、国民にアピールするための政治改革運動に終わってしまっただけは、同じ歴史を繰り返すばかりだ。

8月7日 月例研究会より(要旨)